

産業振興・雇用対策調査特別委員会会議記録

産業振興・雇用対策調査特別委員会委員長 工藤 勝博

- 1 日時
平成 28 年 4 月 14 日（木曜日）
午前 10 時 2 分開会、午前 11 時 52 分散会
- 2 場所
第 3 委員会室
- 3 出席委員
工藤勝博委員長、工藤誠副委員長、佐々木順一委員、関根敏伸委員、軽石義則委員、柳村一委員、千葉伝委員、嵯峨壱朗委員、高橋孝眞委員、千田美津子委員、木村幸弘委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
熊谷担当書記、山口担当書記
- 6 説明のため出席した者
株式会社十文字チキンカンパニー 代表取締役社長 十文字 保雄 氏
- 7 一般傍聴者
なし
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
地元の潜在能力を生かした企業展開の取組について
 - (2) その他
 - ア 委員会県内調査について
 - イ 次回の委員会運営について
- 9 議事の内容
○**工藤勝博委員長** ただいまから産業振興・雇用対策調査特別委員会を開会いたします。
委員会を開きます前に、当特別委員会の担当書記に異動がありましたので、新任の書記を紹介いたします。
熊谷担当書記。
山口担当書記。
これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付しております日程のとおり、地元の潜在能力を生かした企業展開の取組についての調査を行いたいと思います。本日は講師として株式会社十文字チキンカンパニー代表取締役社長、十文字保雄様をお招きしてお

りますので、御紹介をいたします。

なお、会社の概要等について御紹介いただくために佐藤政孝専務と小林義昭専務にお越しいただいております。

十文字様の御略歴につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は地元の潜在能力を生かした企業展開の取組についてと題しまして、県北地域において潜在能力を生かした企業展開の取組や工場増設などによる雇用確保の取組等についてお話をいただくことになっております。十文字様におかれましては大変御多忙のところ、このたびの御講演をお引き受けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど十文字様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、十文字様よろしくお願いたします。

○**十文字保雄講師** 御紹介いただきました、株式会社十文字チキンカンパニーの代表を務めております十文字保雄と申します。どうぞよろしくお願いたします。いつも大変お世話になっております。

きょうは、1時間ほどということで、こんなこと初めてですので、あれこれ考えたのですけれども、まずは当社の会社案内のビデオが10分ちょっとありますので、農場、工場の現場を見ていただきたいと思っております。その後に、きょうはたくさんの質問が来る覚悟で、現場のことを何でも答えられなければだめだなということで、両専務を連れてまいりました。会社概要から、我々にとっては二大プロジェクトと言っているわけですが、バイオマス発電と久慈工場の増設について、あらましを改めて説明させていただきたいと思っております。

最後に、私は潜在能力という言葉を経営でとても重視しておりまして、その辺のことにつきましてお話をさせていただいて、質疑応答をとらせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、まずビデオからごらんいただきます。

〔映像放映〕

○**十文字保雄講師** ありがとうございました。

それでは、佐藤専務からお願いたします。

○**佐藤政孝講師** それでは、私から会社概要と久慈工場の増設について御報告させていただきます。

まず、日本のチキンの産地についてでございますけれども、岩手県は御存じのとおり全国の生産羽数の中で3位を誇っております。1番目が鹿児島県1億3,000万羽、2番目が宮崎県1億2,000万羽、続いて岩手県が3番目、1億990万羽を処理しています。4位は青森県で、約4,000万羽となっております。また、鹿児島、宮崎、岩手の上位3県で全国の56%を生産している寡占状態となっております。

次に、岩手県の農業の位置づけでございますけれども、農業産出額が2,433億円であり、

全国で11位となっています。その中で、チキン産業は県内2位の産出額を誇る主要産業の位置づけとなっております。鶏肉は産出額が497億円、全体の約20%となっております。米が600億円、続いて豚が274億円となっておりますけれども、その中でも畜産が約55%、鶏肉が20.4%であり、畜産の中でもトップを誇っている状況でございます。

十文字チキンカンパニーの規模でございますが、チキンの生産羽数は日本全体で年間6億6,000万羽を生産いたしております。県内では1億990万羽でございます。当社はその中で約5,000万羽を出荷しております。これは、全国シェアの7%でございます。全国の規模で第5位、東日本では第1位の処理羽数となっております。県内の1億990万羽の中では45%を生産しております。県内の規模は第1位となっております。

私どもの会社の概要でございますが、岩手県県北部で主な仕事をやらせてもらっています。本社は岩手県の二戸市でございます。売上高は、昨年度で367億円となっております。総従業員数は1,457名でございます。協力会社を含めると全体では2,200名が私どもの業務に関連してございます。次に、加工工場でございますが、3工場ございます。久慈工場、二戸工場、そして八幡平工場でございます。農場は県内、一部青森県にもございまして、167農場がございます。また、種鶏農場、親鶏の農場は23農場ございます。孵卵場は久慈市山形町と、九戸村にございまして、2工場で全体の仕事を回しております。こちらが本社の写真でございます。

事業内容を写真で説明させていただきます。先ほどのDVDにございましたけれども、まず種鶏を飼育します。親鶏でございます。これが種卵を生みまして、孵卵場でヒヨコに孵化させます。次に、飼育農場にヒヨコを持っていきまして、約50日から60日ぐらい飼育します。体重3キロぐらいまで肥育し、加工工場3工場に持っていきまして、肉にして製品出荷ということでございます。それから、飼育農場から出てくる鶏ふんでございますけれども、七つの鶏ふん処理工場がございまして、肥料化して現在販売しております。次の事業では発電に切りかえる予定でございます。バイオマス発電所でございますけれども、これは後ほど小林専務が詳細を説明させていただきます。

私からは、久慈工場増設について説明させていただきます。まずは、岩手のチキンの競争力強化ということでございまして、処理能力は国内の最大規模でございます。現在は1日6万4,000羽処理しておりますが、新しい工場になりますと9万羽の処理が可能ということでございます。平成29年11月に稼働予定ということで、現在着工いたしております。

久慈工場の大まかなスケジュールでございますけれども、平成28年4月現在、浄化槽の工事に入っております。平成28年9月ぐらいに完成予定でございます。本体の加工場は、今秋ぐらいから着工しまして、平成29年9月ごろに建物が完成予定でございます。そして、工場に機械等を搬入しまして、平成29年10月から11月に正式に稼働予定でございます。それから、補助金の手続等がございますので、平成30年2月ぐらいに確定検査を受ける予定となっております。

大ざっぱな配置図でございますけれども、左の黒いところが古い工場でございます。中

央の赤いところが新しい工場ということで、現在工事を続けてございます。新しい浄化槽が左上にありますけれども、古い浄化槽が新しい工場と重なりますので、先に浄化槽をつくってから工場に移動するという手順でございます。浄化槽は現在建設中でございます。新工場立地法により、緑地帯と駐車場のための土地も購入いたしております。それから、既存の冷蔵庫は新しい工場と接続する予定でございます。すべて完成するのは平成 29 年 11 月ぐらいの見込みでございます。

平成 27 年 10 月 15 日に津波・原子力災害被災地域雇用創出企業立地補助金に採択いただいたことで、久慈工場増設に着工しております。補助事業に要する経費でございますけれども、およそ 87 億円を見込んでおります。補助対象の経費が 79 億円でございます。補助額が 39 億 7,500 万円ということで、補助対象経費の半分をいただくということで、大変ありがたいことだと思っております。ただ、若干デメリットもございまして、前倒し着工によるコスト増大ということでございます。現在久慈工場は稼働できる状況でございますが、このような機会を受けられましたので、着工したのですけれども、古い工場のコストが少し残るといことがございます。もう一つは、建築物価が大変高騰いたしております。ちょっと前の 1.5 倍ぐらいと、かなり物価が高いときの決断でございました。しかし、このような機会がありましたので、日本一を目指して新しい工場を着工する決断をいたしております。それから、東日本大震災による津波の被害でございましたけれども、直接に建物の被害はございませんでしたが、八戸の飼料工場が 1 カ月ほど稼働しなかった状況がございまして、大体 15 億円ぐらいの損失額を出しております。失ったものとなれば、農場で約 180 万羽が死亡し、農場に持って行けなかったヒヨコが 180 万羽あり、360 万羽の損失がございました。

補助金にかかる雇用創出の要件でございますが、1 億円に対して 1 名の新規雇用が必要ということで、岩手県民の方でないといけないわけでございます。久慈工場の場合、平成 30 年 2 月期限までに 86 名の採用が必要ということで地元の雇用にも十分貢献できる事業と考えております。

現在の採用状況でございますけれども、平成 27 年 10 月、補助金に採択されてから着手いたしまして、平成 28 年 4 月現在、新規に 58 名を雇用させていただいております。86 名に対して現在 67%まで雇用させていただいておりますので、平成 29 年 11 月の稼働、そして平成 30 年の確定検査に向けまして 100 名程度を雇用できればと考え、現在も雇用を進めております。中途採用の方もございまして、ことしは高卒の方 13 名が久慈工場に入っておりますので、来年度以降も地元への定着を図りながら進めてまいりたいと考えております。

以上で久慈工場増設の説明を終わります。

○**小林義昭講師** 小林と申します。どうぞよろしくお願いたします。

発電所の概要を御説明させていただきます。軽米町の晴山というところに建てます。プラントメーカーはクラボウという繊維メーカーで、128 年の歴史を誇る大メーカーでございます。鶏ふんの燃焼能力ですけれども、1 日 400 トン、大型ダンプ 40 台になります。年

間消費量は12.6万トンになります。年間の総売電量ですけれども、3,630万キロワットアワーです。1万1,000世帯分の電気に相当しますので、二戸市の世帯分相当になろうかと思えます。売上金額は年間7億8,000万円の予定でございます。予定従業者数ですが、およそ15名の現場作業の方と事務管理職入れて、今のところ19名の予定でございます。

これが発電所内のフローになっております。毎日トラック40台分の鶏ふんをピットの中に運び込みます。クレーンで鶏ふんをホッパーに入れて、コンベアで運びますと、ここにボイラーがありまして、高温にさせるために砂を焙焼させまして、鶏ふんを燃やします。そして、配管を閉じますとこの水が蒸気となってタービンが回り、発電をします。電力会社及びこの中の機械も所内電力を使えますので、全部売電できるわけではございません。これらの残りの不要物をバグフィルターを通しまして、煙突で水蒸気として所内外に送り込みます。それから、この灰は燃焼灰といいまして、コンベアを通り、サイロを通りまして、1日およそ10%、40トン発生しますので、肥料の原料として売る予定になっております。

国内での鶏ふん熱の利用の背景としまして、平成11年に家畜排せつ物の適正管理を義務づける法律ができて、平成16年11月から発効しております。国内では鶏ふん肥料の供給過多がありまして、肥料以外の処分方法が模索されておりました。その中で、平成14年1月に新エネルギー利用等の促進に関する特別措置法、平成15年4月には新エネルギー等の利用に関する特別措置法の制定によって、バイオマスエネルギーの利活用が促進されました。こういった問題を経て、南九州地方では平成14年以降、鹿児島と宮崎、全部で4施設、合わせて5基の大型鶏ふんボイラーが次々に稼働しております。

ごらんとおり、国内では5番目ですけれども、本州では、我々が初めてでございます。一番最初が宮崎県の南国興産株式会社です。平成14年に営業開始しております。これが1号、2号です。南国興産はみずからの化製工場を持っていますので、自社で半分以上を使い切って、なおかつ余ったものを九州電力に売ることができます。非常に効率的ないい面を持っております。2番目は、宮崎県のみやざきバイオマスリサイクル株式会社です。年13.2万トン焼却、全部発電、売電しております。なお、3番目、鹿児島県の有限会社南九州バイオマスは、年4.2万トン焼却ですけれども、蒸気を利用して、発電、売電しております。実はここもすぐそばに工場がありますので、この蒸気を利用して、非常に効率的な活用をしています。4番目、株式会社ジャパンファーム、これは三菱系ですけれども、鹿児島県です。ここは、平成27年6月に稼働しております、年8万トン焼却です。ここもすぐ近くにエクス工場がありますので、効率的な利用の最たる工場だと思います。きのう、ここのお客様と一緒に食事をさせていただきましたけれども、まだ売電が整っていないようです。間もなく配管等を整えて売る予定とのこと。結びに、当社がようやく今年9月に営業開始の予定でございます。年12.6万トン焼却です。これは全て発電に回そうという形になっております。

当社ではこれまで、鶏ふん処理の課題がございまして、年間およそ13万トンの鶏ふんが

発生しております。毎日大型トラック 40 台分です。従来は、発酵肥料工場が 5 カ所、炭にする工場が 2 カ所ありまして、7 カ所で処理しておりました。肥料需要の季節変動による在庫保管ということで、実は春肥が一番なのです。春に大体 6 割から 7 割、次が秋ということで、年に 2 回ぐらいの大きな需要期にしか出ないということがあって、在庫の保管等々の負担もございます。さらに、鶏ふん肥料の需要が非常に減少しております。特に東日本大震災後に東北管内どこでもそうらしいのですけれども、自分のところでつくって、子どもや孫などつくっていただく方がほとんどなくなっていくということもあって、今後とも需要が減少していく、あるいは効率のいい化成肥料にかわっていくことから、肥料以外の処分方法が模索されておりました。

いろいろな事業を検討した経過がありましたけれども、平成 23 年 8 月に再生可能エネルギー電気の調達に関する特別措置法が成立しました。この事業にとっての追い風は、鶏ふん発電事業の参入が容認されましたので、私どもとしましても前々からプロジェクトチーム等々を検討しておりましたけれども、これをきっかけとして一気に参入に至ったということになります。実はこの赤印のところは、その他のバイオマス発電ということで調達価格 17 円プラス税金、若干これに気持ち有利なところと交渉しているところでございます。ちなみに、バイオマスの中でもメタンガスが 39 円、間伐材等々の木質バイオマスは、2,000 キロワット以下とそれ以上とありますけれども、40 円ということで非常に高いです。

これが配置図でございます。これが実は道路になっていまして、軽米方面がこちらです。これが二戸及び八戸方面、ここは昔から俗に塩の道と呼ばれていたようです。国道、県道ではございませんけれども、意外と通りが多い、生活経済ルートであったようです。ここが入り口になりますけれども、縦横 55 メートルと 115 メートルの大きさになります。それから、ピンク色の所が貯水池でございます。全体から来る水をため、そのまま水を少しずつ流していくという形になってございます。

現在工事中でまだできておりませんから、直近の写真でございます。西側から見た部分で、ここに受け入れピットが 4 個ございます。ですから、1 日 40 台来たとしてもスムーズに流れることができます。

こちらは南西側、道路から見たほうですけれども、この辺が壁体、一番高い煙突がこちら辺に立ちます。32 メートルぐらいの高さになります。

これは北東側から見たところですが、ちょっと見づらいかもしれませんが、まだここに煙突が見えております。入り口側がこちらになります。

プロジェクトの推移をご説明させていただきます。実は平成 24 年 7 月に発足しました。この前にプラントメーカーと随時交渉しておりましたので、どのぐらいかかるのかとか、概算見積もりだとか、これに遡ること 2 年ぐらい前から検討しておりました。ついこういったことからプロジェクトが発足しまして、平成 25 年から住民説明会を全 3 回ほどさせていただいております。その後、平成 25 年秋に山林 5.6 ヘクタールを土地取得しまして、平成 26 年 2 月に軽米町と公害防止協定を結んで、その翌月にプレスリリースさせていただ

きました。同時に経済産業省よりF I T設備認定取得ができました。それから、東北電力株式会社から系統連系承諾もいただきました。実はこの年に造成工事がようやく始まりまして、約1年かけまして開発検査を含めた造成工事が完成しました。その後建築の工事が始まりまして、約1年弱ですけれども、平成28年5月いっぱい完成の見込みでございます。それを受けまして、平成28年6月1日から徐々に、試験運転してまいります。実はこの中に出てきませんけれども、うちは系統のボイラー等と燃焼効率を二つにしました。ですから、何か事故があった際には片側が必ず運転できる、年間を通じて稼働できるということで、若干コストは高くなりましたけれども、効率的な運営を図れるということで選択しました。そのメンバーに佐藤と私ということになります。何とか平成28年9月1日に運転しまして、正規のバイオマス発電というふうにしていきます。これも皆さまのお力添えを得たおかげでようやくこのときを迎えまして、本当にありがとうございました。

これが完成図でございます。周りに配慮した公園になる予定でございます。どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

○十文字保雄講師 それでは、最後に私どもの経営の考え方を御説明させていただきます。

会社の歴史を説明させていただきます。1960年創業でございます。私の父、十文字健助が鶏を飼いだめたということでございます。当初は、採卵養鶏でございます。4年後に肉養鶏の飼育を開始しております。会長は非常に新しいもの好きでしたので、当時ブロイラーが日本にやってくるかこないかのころ、農業協同組合の勉強会で、これからはこれが来るということでさっと乗りかえて、肉用に移っていったということでございます。

1970年、我々は農場から始まった事業でしたけれども、鶏肉加工事業を開始し、工場もやろうということでございます。

鶏ふんの事業をスタートしたのは、1974年でございます。

法人化したのは、やっと1975年でございます。有限会社十文字養鶏という社名でございます。

1978年、久慈に誘致企業として進出させていただきました。

1989年には全国農業協同組合連合会で全国の鶏の事業を再編するというので、岩手県の事業は十文字に任せたほうがいいのではないかという話がありまして、ジョイントベンチャーという形で岩手農協チキンフーズ株式会社ができっております。

1991年、株式会社十文字チキンカンパニーという社名にいたしまして、会社のマークをつくったり、整えたということでございます。

私が社長になりましたのは、2002年でございます。今15年目です。

社長になった翌年でしたけれども、新しい社屋に引っ越しまして、二戸のバイパス沿いに存在感をある程度示すことができたかなと思っております。

2013年、3年前ですけれども、私どもの3工場から出荷する鶏は全て岩手県産となっております。青森とか、宮城の農場はありましたけれども、他社の工場に供給をさせていただいて、私どもはもう岩手印ということを明確に示して、食の安全の絡みもありまして、

付加価値を高めたということでございます。

企業理念でございます。さっきもビデオでありましたように、地域と我々の潜在能力を引き出し、真に価値ある食品作りを通じて豊かな食生活に貢献するでございます。

私は田舎の生まれでございます。二戸の中でも本当に奥に入ったところの生まれで、小学校に行くにも30分ぐらいかかって行くところでした。そこで父親が鶏を飼い始めました。それはドキドキで、高校は盛岡に来て、大学は東京のほうに来ました。社会に出てからは、このビジネスはワールドワイドですので、海外もたくさん行かせていただいたのですが、逆に地元の岩手県がだんだん見えてきて、もっともってるパワーを発揮できる要素が人にもあるし、地元にもあると思っていました。それで経営者になったということで、この言葉を大事にしたいと思っております。

真に価値ある食品作りについては、我々は国内で5番目に生産していますので、たくさん生産している会社がいいものをつくれれば、これは本当に社会的な価値があるのではないかと、量をベースにしてクオリティを高めていきたいということでございます。

豊かな食生活に貢献するについては、我々はどうしても単純に卸に売ることによって終わってしまいがちなので、卸の次にスーパーなり小売店があつて、さらにその次に消費者の方々がいらっしゃるということで、食べていただくところまで見て、想定して仕事をしていきたいと思いますと社内で言っております。

企業メッセージですけれども、ビデオの中にありましたが、人・動物・環境の健康を考えるとということでございます。外に向かってアピールしていく言葉を考えたのですが、人の健康、これは当たり前でございます。次が動物の健康ですね。これは専門用語でいいますと、アニマルウェルフェアという言葉で、動物福祉と訳されます。動物愛護というのはどちらかというと人間から動物への愛情ですけれども、動物福祉というのは動物自体の幸せと申しますか、人間とはかかわりないところでの幸せという意味が含まれております。日本では、比較的まだ薄い考え方だと思いますけれども、これから先はこういった考え方が大事になってくるということで盛り込ませていただいております。最後、環境の健康は、これもエコロジーという言葉であらわされるように、今はもう当たり前になっておりますので、この三つのバランスをとっていくということでございます。実際全てがパーフェクトにできているということではなくて、過去を引きずりながらレベルをちょっとずつ上げていこうということでございます。

せっかくですので、今CMで社歌が流れておりますので、後でござんいただければと思っております。私の思いを込めて詞をつくらせていただいたところでございます。

話は変わってきますけれども、潜在能力という意味で、僕はいろいろ本を読んで岩手県の県民性を考えることが多くて、せっかくですので、本にあるものをリストアップして、そのまま載せさせていただいております。

一つ目は、岩手県人の真面目な気質は北東北3県に共通するが、お隣の秋田県人がお人よしで遊び好き、青森県人が世渡り上手と評されるのに比べると、岩手県人は真面目でし

っかり者、おとなしく粘り強く頑固、要領が多少悪くても着実に事を成し遂げるといった愚直さが特筆される。なお、岩手県人と長野県人は気質が似ているという。両者とも寡黙で口下手、そして理屈っぽく、正義感も強いので、真面目で反社会的行為に対する姿勢は厳しいということのイメージがある。

もう一つ、別な本に書いてあったことをご紹介します。岩手県人は口数が少なく、冷静沈着で、思慮深いです。素朴でまじめな努力家が多いようです。とはいうものの、どこか決め手に欠け、地味な印象しかない。それすら岩手県人の特徴になっているほどです。

さらにもう一つ、また別な本でのごさいます。東北人は暗いと言われていますが、中でも岩手県民は特に暗いです。しかし、それは内に秘めたものがしっかりあるためです。また、内側に心に向けて思索に耽っているため、ロマンチストな人が多いのも岩手県民の県民性です。岩手県民の県民性の短所は暗さにあるのではなく、排他的な性格にあります。部外者は寄せ付けず、仲良しだけで固まってしまい、警戒心が強いです。言いかえれば、仲間意識が強いのが岩手県民の県民性でもあります。

私も岩手県民の一人でありますので、思い当たるところがあると思うと同時に、自分の会社に入って、こういった様子で仕事をやっていたら成果が出るのかと非常に危機感を感じておりました、やはり何とか成果が出るような社風というか、社内にしていかなければならないと思っておりました。結果的にあれこれ悪戦苦闘したのですが、こういうことではないかということで、今回まとめさせていただいております。

県民性と当社の仕事というふうにとめました。

まず、活用できることなのですが、1番目、真面目・正義感については、我々の命題は安全・安心な食品を作ることをご紹介しますけれども、本当に岩手県民の県民性は非常に価値があると思っております。

2番目、粘り強い・努力家といった要素は、我々は鶏の生命管理あるいは工場での定時定量、どんな災害があっても首都圏に毎日安定した量を届けることは非常に苦労があるわけですが、こういうことができるというのは、やはり岩手県民の特質ではないかと思えます。

3番目、口下手・地味については、口が上手であればサービス業に非常に適しているのではないかと思うのですが、やはりこういった気質は製造業という職には非常にフィットしやすいかなと思えます。

4番目、愚直・冷静については、嘘を言わない、派閥を作らないところは、本当に我々のような1,000人、2,000人の組織になると本当にありがたいというふうに思えます。

逆に、修正点としまして、1番目、排他的という言葉がありましたけれども、我々は首都圏のお客様が大半でございますので、これは直すしかないわけでございます。お客様の言うことが全てということですよ。

2番目、頑固・暗いについては、研修や出張等で異文化に触れる機会を作ると書きましたけれども、いずれ世の中が狭く見えてしまっていたら、やはりそのまま頑固だったり、

暗かったりということだと思いますので、世の中の広いところを見せてあげようと、社員の教育的なところにもう少しお金使ってやっていけば何とかかなと考えております。

3番目、内に秘めるについては、内に秘めてしまって終わりということですが、持ち前のパワーはやはりあると思いますので、燃焼させる仕組みをつくっていききたいということです。農家の皆さんにも、きのう1年に1回集まる会議でしたけれども、成績ランキングをつけて上位の方には得点をつけて競うようにしたり、内部では温かくホットな雰囲気をつくる仕組みを考えてっております。

最後、ロマンチストについては、いい意味、悪い意味あると思うのですが、ちょっとふわふわしたイメージで受けとめたとすれば基本のところはしっかり受けとめられていないのかなと思います。仕事をする上での基本をしっかり植えつけていただいてからロマンの世界に行っていただくことが大事なのかなと思って、凡事徹底という言葉は社内で非常に大事な言葉として使っております。

潜在能力を引き出す仕組みということで、学生さんにも説明しているわけですが、1番目、5S、整理・整頓・清掃・清潔・躰という言葉はトヨタイズムではないですが、製造業の基本中の基本でございまして、これをいかにどれぐらいまで深くやるかということなのですが、我々はかなり徹底してやらせていただいております。

2番目、カイゼンについては、これもトヨタイズムのような世界ですが、昨年対比ということで、周りの同業他社と比べると、そういう要素もあるのですが、まずは一人一人が去年の自分よりことし、ことしの自分より来年の自分というふうに、部門もそうですし、過去よりよくなるということの連綿とした活動があれば何も間違いはないだろうという意味でございまして。

3番目、大家族主義については、私は稲盛和夫塾長の京セラフィロソフィを十五、六年ずっと学んでおります。その根幹の考え方で、家族同様の感覚でやっていこうということで、年2回の合宿で近くの温泉に泊まって勉強会と食事会、新年会は中途半端なことなく徹底して楽しくやる。あるいはブログと書きましたけれども、社内で一人一人週に1回ずつ、現場の方は別ですが、自分のプライベートでも何でもいいから書いて、それにお互いにコメントをしていくことでちょっと温かい気持ちになってもらうということをやっております。

先ほどの話にも出ましたけれども、4番目、凡事徹底でございまして、ラジオ体操、掃除、朝礼、これを朝やっておりますけれども、こういったことを大事にしております。

チキン産業の特徴といたしまして、改めて御理解いただければと思っております。

世界で最も伸びている畜肉でございまして。世界中で牛、豚、鶏が三大肉ということ、4番目には羊あたりが来るとは思いますけれども、世界で圧倒的に一番伸びているのは鶏肉でございまして。強いて言えば中国の豚肉が例外ではないかと思いますが、中国国内でも鶏肉はもちろん伸びています。それ以上に豚肉が伸びているということだとは思いますが、それ以外の国はもうほとんど鶏肉でございまして。

その理由の一つにもなるかもしれませんが、飼料効率がもっともよい畜肉になります。牛が1キロ太るのに大体8キロのえさ、豚が1キロ太るのに3.5キロのえさに対して、鶏は2キロとこの間まで言っていましたけれども、2キロが1.9キロ、1.8キロになっております。それだけえさを必要としません。トウモロコシ、大豆、といった世界中の資源を有効に活用するためにも非常に価値があると言われております。

今言いましたように、鶏種が世界で寡占化されていて、鶏というのは一つの世代で約100倍にふえます。100倍にふえるので、次が1万倍、その次が100万倍、その次が1億倍、その次が100億倍ということで、5世代ぐらいほぼ5年ですね、5年のうちに世界を征服できます。いい血ができればですね。牛、豚と違いまして、世界で何種類しかない状況になっておまして、効率が非常によくなってきて、黙っていても我々はコストが下がっていくという、ありがたい産業でございます。

日本人1人当たりの消費量は約15キロでございます。豚肉が大体20キロ、鶏肉が15キロ、牛肉が大体10キロと覚えていただければいいかと思えます。日本人は、それ以外に魚を食べるわけでございます。その魚の消費量がちょっと減っているという状況で、鶏肉はちょっとふえている、豚肉もふえている、そんな状況かと思えます。数量は世界基準でいいますと、アメリカ人は年に45キロ食べるということでございまして、これはアメリカだけではなくて、欧米は大体そのようなレベルでございます。そういった意味では、日本人の消費量が同じようになるかはわかりませんが、少なくとも2分の1ぐらいになっても不思議はないのかなと思っております。

2カ月弱で農場出荷でき、現金化しやすいというのは、牛、豚に比べてということになります。先ほども言いましたように、あっという間に大きくなってしまいますので、非常にビジネスライクな業界と言われております。

日持ちがせず、輸入品は冷凍なので差別化と書きました。実は、我々は過去を遡りますと、平成4年、5年、それから7年、8年、11年、12年、2期連続赤字が3回ありまして、私も潰れるのではないかなと思ったときを経験しております。平成3年、4年、7年、8年あたりはもう本当に完全に輸入品に負けて、国内生産が本当に大変厳しい状況だったわけですが、今、食の安全が盛んに言われるようになってきたということと、鶏肉というのは鮮度が必要でございまして、賞味期限はマックスで9日でございます。9日のうちにアメリカから鶏肉がフレッシュで来れるかということと来れない。アメリカであれ、ブラジルであれ、中国であれ、なかなかそういうところは厳しい。そういった意味で、鶏肉は国内のものは冷凍しないでそのままの鮮度で食べていただくということで、今はそういった意味での差別化が非常にはっきりしております。昔は輸入品に結構足を引っ張られたのですけれども、今は国産がスーパーで売られているようなテーブルミートとしては圧倒的に普及している。ただ、消費の半分以上はフライドチキンだったり、総菜だったり、外食だったり、そういったものが占めていますので、そこには表示の義務はなく、輸入品が浸透している状況でございます。

新聞等々を見ていると、今外食にも産地表示をしようとなっておりまして、これも国産にとってはとてもありがたい話でございますけれども、逆に産地表示になり過ぎて、国産をもっとつくれと言われても、急にはなかなか簡単にできないことが問題になってくるのではないかと今心配しております。

部分肉にするのに多数の人手が必要ということでございます。鶏肉はごらんいただいていますように本当に小さいものでございまして、小さいものをさらに細かいパーツのお肉にしてやっと商品でございまして、我々の会社では、3工場で1,200人ほど働いております。県内では我々が45%ですので、2,500人ほど働いていらっしゃる、農場とか、それ以外のいろんな仕事を含めればもうその倍ぐらいの方々が働いているということで、小さいからこそ労働力がたくさん必要ということでございます。

最後になりますけれども、耕種農業に比べてということですが、屋内でつくるものですので、比較的安定生産ができるのではないかと思います。どんなに成績が悪くても大体80%台でございまして、当社の平均では94%の育成率でございまして、これが80台に落ちたら、その会社はなかなか残っていないと思われる状況でございまして、そういった意味ではもう本当に安定しています。ただ鶏肉の相場だけは上下しますので、3年に1回ぐらいは厳しいときもありますけれども、安定しているといえれば安定している。うちの会長は、よく昔、農家の方々にこっちのほうが安定しているから勤めたらどうかという決めぜりふで人をたくさん集めたと自慢しておりますけれども、そういうことがあるかなと思います。

チキン産業の立地条件として、御理解いただければと思っておりました。

農場としては、八戸港、これが日本でも五本指に入る大規模な飼料コンビナートでございまして、それだけえさが安く手に入ります。これは本当に価値あることとございまして、八戸のコンビナートから近い農場というのはすごく価値があります。

どこに建てるかということですが、やはり最近住宅のそばは非常に敬遠されております。道路のアクセスがよくて、大規模化が進んでおりますので、2ヘクタール以上欲しいということとございます。

それから、近隣に葉タバコとか、そういう農家がいらっしゃると、粉じんがちょっと出ますので、共存はできないというのが現実になっております。九戸村は特に他社も含め鶏の農場が密集しておりまして、こういったところに、さらに農場を建てるとう病気が蔓延して、成績が落ちてしまうことになりますので、できるなら新しいところをどんどん開拓していければと思っております。

工場としては、我々が久慈工場の増設を決断した一つの理由は、大規模化することがやはり生き残りの王道ではないかと思っております。今、久慈工場でも、八幡平市の工場でも約500人の労働力が必要でございまして、これから地元の人口減が予想されているわけですが、工場の機械化が進んでくるとは思うのですが、これぐらいの人数がずっと集まるようでないとならぬかなと思っております。

地下水も必要でございまして。

我々の一番のお客様は首都圏でございますので、交通利便性ということで、久慈工場は三陸道が無料になって、なおかつスピーディーに、雪がないところを通っていけるということで、我々は非常にそのところも期待しているところです。

日本ではまだまだなのですが、海外では昼夜2交替が常識になっておりまして、一つの工場を昼夜2倍動かすということでやっております。将来、そうなっていけるのか、国内同業者で10年も20年も議論があるわけですけれども、まだどこもやっていない状況でございます。

宣言ということで、学生さん向けにちょっと格好つけて言っているのですが、2億羽、今の4倍、シェアが7%から30%と約4倍、売上高1,200億円、プロスポーツチームをいくつか持ちたいなど、青森県といえばリンゴと言われたら、岩手県といえばチキンと言われるぐらいになっていきたいなというふうに思っております。プロスポーツチームの話はもう30年、25年くらい前、もう四半世紀前になりますけれども、フランスの鶏の会社の令嬢が当社に来ましてお話ししていたら、プロサッカーのフランス1部リーグで優勝争いをしていたという話を聞いて、もうびっくりしました。日本国内では日本ハムぐらいしかそういうレベルのことはできないわけですけれども、いつかはそういう姿になればなど学生さん向けに言っております。2005年から言っているのですけれども、だんだん近くなってきて、2025年、非常に厳しくなっているというのが正直なところです。

最後になりますけれども、県民性のお話をさせていただきましたが、地味に見られる岩手県人でも本気でやればどこにも負けないということを証明したいという思いで社員の皆さんと一致団結してやればいいのかなど思っております。これからもどうぞ御支援のほどよろしく申し上げます。

○**工藤勝博委員長** 大変貴重なお話、そしてまた映像も見させていただきました。ありがとうございます。

それでは、これより質疑、意見交換を行いたいと思います。ただいまお話をいただきましたことに関し、質疑、御意見ありましたらお願いをいたします。

○**軽石義則委員** どうもありがとうございました。すばらしい経営方針のもとに経営されておられる様子であって、詳しく説明いただきまして、感謝申し上げます。

私は県北の各市町村を回りまして、いろいろ事情をお聞きする機会があってお聞きしているのですが、雇用の場の確保は行政も真剣に取り組んでいるし、考えているけれども、人をそこに定住してもらうための条件整備というのはなかなか厳しいというお話を聞いております。これは学校のあり方も含めてだと思っておりますけれども、今、新入社員も多く採用されて、非常に期待をされておられるという話もありましたので、そういう意味ではこれからの採用方針といいますか、企業としてどういうふうな形にしていきたいかということをもう少し詳しくお聞きしたいと思います。また、現状の従業員数1,457名ということでかなりの採用規模だと、人員規模だと思いますけれども、年齢構成、いわゆる労務構成ですね、男女比率、年齢別というのはどのような状況になっているのか、また雇用形態

ですね、例えば今よく言う正規、非正規という2分類ありますけれども、さらにパートとか、フルタイムとか、いろいろあると思うのですが、それらについて再度少しお伝えいただきたいと思います。

○十文字保雄講師 今テレビCMもやらせていただいているのですけれども、大体地元の方に言われるのは、こんな会社が地元にあるとは知らなかったということをよく言われます。それだけ今まで地味にしていまして、我々の世界はどちらかというところ3Kの職場で、余り表に出すものではないイメージがありました。ただこの業界、ビデオでもありましたように工場もきれいにしておかないと食鳥検査だとか、世間の求めるレベルが高くなってきていましたので、それなりにお金をかけて見られる現場にしていかないと事業として全然立ち行かなくなってきた。そういう状況の中で、ちょうどよかったので、現場にもしっかりお金を投資して見られるような雰囲気にして、そのことを外にもある程度知らしめていく。そのことができれば、今までのことは非常に低いレベルだったので、自然と何とかなるのではないかなと思います。事業としてはそこそこ採算が合っていますので、賃金のレベルだとか、そういった意味ではそんなにほかの仕事に比べて引けを取るものではありませんので、待遇面ではそんなに心配ないと思います。とにかく伝え方がしっかりいれないということ、今は大学卒業して5年目ぐらいの社員に、チラシをつくるにしても何にしても新しい感覚でやってちょうだいと指示してやっております。

○佐藤政孝講師 社員の年齢構成でございますけれども、私どもは定年が60歳と決まっております。工場のほうは、千数百人おりますけれども、大体60歳前後のひとかたまりが多くいます。それから、今は若手が入ってきておりますので、20代が大きいひとかたまりという形で、40代、50代がちょっと狭まっているような構成になっております。

定年後の雇用でございますけれども、65歳まで嘱託雇用という制度がございます。本人と会社の要望が合致すれば1年ごとの更新という形で65歳まで、65歳過ぎても元気な方はアルバイトという形での雇用をお願いしている状況でございます。

また、正社員ですか、パートですかということなのですが、ほぼ正社員でございます。パート社員というのは、ほとんどいないと思います。正社員でございますので、当然雇用保険等も出ますし、ボーナスもございます。ただ、嘱託になりますとボーナスも若干減るか、ない場合もございますけれども、ほとんど雇用保険等もしっかり掛けておりますし、社会保険も加入している社員になります。

○軽石義則委員 ありがとうございます。まだまだ期待される場所がありますし、20代の塊が大きいというのは将来的に人手不足を解消できる対策をしっかり進めているのだなというふうに思います。行政にさらにこういう支援があればもっと人を採用する意欲があるというところ、それから、さらに事業展開をする場合に、先ほど新工場に対する助成金の話もありましたけれども、それらについてもっとこういう制度があれば、さらに事業は拡張できるというような、拡張することによって人材の確保も必要になってくると思うのですが、それらについて何か思いがあればお聞きしたいと思います。

○**小林義昭講師** 今は発電を中心として環境課というところにおりますが、つい2月までは生産部を担当しておりました。やはり我々は経済活動を通じて利益を上げなければいけません。久慈工場の拡張のお話もありましたが、どんどんと農場もリニューアル、新しくつくっていかねばならない。そういう中では、特に県北地域でお世話になっておりますけれども、例えば、あくまでお願い事ではありますが、基本的に当社で農場をつくる場合、おおよそ2,000坪クラスをつくることになります。そうすると造成を含めると大体4億円から5億円ぐらい投資がかかります。ですから、できる限り、数年で結構でございますので、固定資産税の減免など、そういった措置を積極的に取り入れていただければ思い切ってその土地のほうに入っていくことを促進していきたいということで、私も軽米町ですとか、二戸、久慈広域圏内のところにお邪魔してお願いをすることがあります。そういったことを含めて何かの助成いただければと思います。決してまだまだ体力が強いわけではありません。そういったことから、首長の皆さんがうちに来いということも時にはあるのですけれども、積極的にお声がけいただければ参加してまいりたいと思います。その辺りをよろしく願いいたします。

○**十文字保雄講師** 私からもですけども、高校生とのパイプが、ここ5年ぐらいでやっできてきて、スムーズに回っているような状況なので、ボリューム増ができております。やはり現場に来ていただいて、見て、あるいはアルバイトをちょっとしていただくなど、そんなことで身近に感じてもらえれば結構チャンスがあるのかなと思います。そういう機会があまりなく、たくさんの方が工場に来る結果になっていないので、やはりそれぐらいの人で終わってしまうところがあるのかなと思っています。うちは3工場それぞれ10人ぐらいずつ毎年採用していますけれども、今は20人でも全然問題ないぐらいになっていますので、もっともっとたくさん見に来ていただいて、パーセンテージを上げればと思っています。

○**軽石義則委員** 大変ありがとうございました。私も現場に行つてじかに見たいと思いますので、その際にはよろしく願いいたします。

○**十文字保雄講師** お声がけいただければお待ちいたしております。

○**関根敏伸委員** きょうはどうも大変ありがとうございました。何かの冗談の話で、農家の人たちに向かって豚はトントンで、鶏はケッコーだなんていうたとえ話がありまして、鶏は本当にもうかるのだなというのがきょう改めて実感をさせていただきました。社長の2025年の目標も実現なされるのではないかなと御期待を申し上げたいと思います。

何点か聞かせていただきたいと思いますが、きょう初めて動物福祉という考え方を聞かせていただきました。鶏のえさにエゴマを与えたり、乳酸菌を与えたり、人並み以上に非常に厳選されていらっしゃるなと感じたのですが、これは動物福祉という考え方から実行されているのか、商品の差別化という流れの中でブランド化を図るためにやっていらっしゃるのか、それをやられることで鶏のブランド力というのはどう変わるのか、この辺りまず聞かせていただきたいと思います。それから、カイゼンをされていらっしゃるのですけれ

ども、これはトヨタ式のカイゼンを導入されているのか、具体的に県もカイゼンによって中小企業の生産性向上というのを大きく掲げているわけですが、こういった効果がこのカイゼンによって御社にもたらされているのか、この辺をちょっと聞かせていただきたいと思います。

○佐藤政孝講師 まず、アニマルウェルフェアとブランド化のことですが、先ほどのエゴマ油脂とか、合成抗菌剤を使わないのは商品の付加価値を高めるための目的が大いにごさいます。

アニマルウェルフェアは、今国内で研究に入っておりまして、どちらかというと採卵鶏ですね、卵の鶏がケージ飼いになっていますので、そちらのほうの規格はできておりますけれども、ブロイラーは、これからまたいろいろと詰めをしているような状況でございませう。私どもは、ことしの4月から動物福祉課という課を設けまして、その中で専任の獣医、女性でございませうけれども、彼女がこれから主に研究していくことで取り組もうと考えております。

○小林義昭講師 実は11年ぐらい前、現場カイゼンというのが始まりました。先生を招きまして、各工場ごとにやるのですけれども、例えばやきとりの部屋がありますね、あるいはもも肉をカットしたり、チューリップをつくったり、いろんなパート、パートであるのですけれども、そこで実際に非効率なところを現場カイゼンするというやり方をずっと整えてまいりました。無駄な動きをしない、あるいは余分な歩き方をしない、目の前で手足を動かすやり方で、できる限り社員に負荷をかけないように、もちろん現場からも案を引き出しながらやってまいりました。これが非常に効果を上げてきたという10年かと思えます。先生は、実はトヨタ方式に近い先生で、御年八十一、二歳、会長と同じぐらいの年齢でありまして、一旦ことしの4月で別な形でアドバイスいただくことになりました。実は1年前から、別な先生を招きまして、今度は職場全体を巻き込んでやるという方式に切りかえまして、八幡平工場で1年前からやっています。これも社員のベクトルといいますか、モチベーションを上げるやり方でみんなの意見を取り入れながら、私はこう思うのだけれどもどうですかと、そういうカイゼンを一気にみんな一緒にやるということで、価値が非常に高まった1年だったかなと思えました。それを今度は久慈工場、さらには二戸工場に展開してキックオフ、今週始まったところです。

さらに、カイゼンの中でもいろいろなカイゼンがあるわけですが、実は社長賞が一番高いのですけれども、10万、5万、3万と、カイゼンできた社員に還元するものが年に1度ございませう。それぞれの推薦者がいまして、彼らはこういった形で非常に役に立ちましたと推薦され、最終的には役員会でもみながら決断するものです。これはお金として目に見える場合もありますし、逆に言えばことしは二戸工場で倒れた方がありまして、心臓マッサージ、AEDですね、それを助けたことが実は社長賞をとったのです。決してお金だけではなくて、そういったことでモチベーションを持っていただくということと心の表彰といいますか、そういったことも取り入れて、何とかみんなを巻き込んでやれる

ような一助になればということで、今後も続けていきたいと思えます。

○十文字保雄講師 補足ですけれども、銘柄鶏に動物福祉ということなのですから、正直に言うとやはり低付加価値、付加価値があるのだけれども、さらに安いものというニーズがともあります。我々にとっては芳しくない、食べても余り違いがないものでも付加価値をつけたいというニーズがあり、アニマルウエルフェアというのは肉にどうのこうのというより、育てているプロセスに着目したという商品で、最近ちょっと苦労しながら新商品に行き着いたというのが正直なところでございます。食べてもよくわからないというのが正直なところです。

○関根敏伸委員 どうもありがとうございました。カイゼンはやはり大分効果を上げていらっしゃるというふうに聞かせていただきました。御社のような大企業でのカイゼン効果というのは期待できるのだと思うのですが、岩手の場合は小規模で小売とか、サービス業の生産性が非常に低いのが全国的な傾向ですけれども、そういったところへもカイゼンを導入して効果が上げられるものなのかどうか、導入された側としてどういった考え方をお持ちなのか聞かせていただきたいと思えます。それから、バイオマスのことですけれども、鶏ふんを使ったバイオマス発電で非常に期待しているのですが、素人でわかりませんが、岩手では結構木質のバイオマスもどんどんでき始めていますが、片側でバイオマス燃料の木質がなかなか集まってこないというような、いろいろな流通形態にいろいろな影響も出始めているということもあります。極端に言うと鶏ふんと木質を混焼することがプラント的に可能なのかどうか、そういったものができればうまく土地、土地の木質と鶏ふんとかいろんなものが効率よく燃えて発電ができてと感じたのですけれども、その辺プラント的に実現できるかどうかを聞かせていただきたいと思えます。

○十文字保雄講師 まずカイゼンの話で、小売とかサービス業にという話でしたけれども、やはり他社からの話も聞いていて、受け入れる側の感覚というのは物すごい大事でございます。うちの社内でもそうなのですけれども、若い連中みんなに教えたとしても、感覚が永遠につかめない人とぱっとつかめるセンスがある人と二分されてしまうので、やはりそういうことがわかる人にどんどん教えてやるしかないのかなと、何かそういう印象はすごく強く持っています。

バイオマスについては、当社の鶏ふんというのは、実際は鶏ふんが半分で、半分は木質バイオマス、もう既にヒヨコが入る前におがくずをしきますので、それが残っているのが半分なのです。ですから、本当に完全なふん尿というふうには言い切れない部分があるのですけれども、売電価格 17 円のところに該当しているというのが現実でございます。それをプラスして何をすることになれば、恐らくこのカテゴリーに入らないだとか、後で損害賠償だとか、違反だとか、何かそんな話になるのは非常に怖いですし、機械のほうもそれで壊れてしまったら、またそれもややこしい話になりますので、やはりルールに従ってやればよいなというふうなところで落ちつくと思えます。

○関根敏伸委員 そうしますとプラント的には、機能的には可能だということなのですか

ね。ただ、F I T法による木質と鶏ふんでは買い取り価格も違うのでしょし、混焼によって買い取りの仕組みが変わってくるとか、いろいろ問題があるのではないかと思うのですが、ただ可能であるとすれば岩手みたいなどころでは、両方平和にできれば地域、地域にいろんな発電の仕組みができるのかなと思ったのですが、もう少しそこを教えていただきたいと思います。

○**小林義昭講師** 実質可能でございます。燃焼効率を考えたときに、例えば十分な条件、おかくず、敷料がありますのでそれだけで十分なのですが、なおかつここに木質を持ってきたりすると燃焼が安定しないのです。それを克服するためにはもっとすごい設備が必要です。逆に言えば、最近では廃材ですとか、木質はもうかりますので、海外から買ってくるという業者もいます。九州のほうでは5カ所以上に、バイオマスに加えて木質バイオマス工場がもう八つだか十近く出てきて、はげ山がどんどんできて、そういう効率ばかり追っていくと実は燃焼がかえって安定しないということになります。もう一つは、痛みといいますか、それも考えると、あれもこれもというよりも、安定したリサイクルを考えた場合に、どちらかというところのほうの、今までは余分なものとして背皮とか、木からできた端っこのものからつくっていますので、そういうのが非常に効率的でエコに近い状況かと思えます。これが木質を取り入れない理由、小さければできるのではないのでしょうか。

○**千葉伝委員** 御苦労さまです。いつもありがとうございます。

岩手県のチキンということで、十文字さんが全国の中でもトップに近い格好で頑張っているということでもあります。

お聞きしたいのは、一つは今問題になっているT P Pで、今回のT P Pが発動した場合にチキンも何らかの影響があるのかなのか、あるいは大丈夫だとか、そういったあたりの感触というか、考えをひとつお聞きしたい。

単純な話で、バイオマスがいろいろ紆余曲折あってようやく完成するというところで、大変うれしく思っております。稼働してから、売電を含めてペイするまではどのくらいを見ているかというあたりを先にお聞きしたいと思えます。

○**十文字保雄講師** まず、T P Pに関してなのですが、今輸入チキンの85%がブラジルでございます。それ以外の国がタイ、その次がアメリカということで、アメリカだけがT P Pに該当するのかなと思っております、ほんの数%でございます、なおかつ鶏肉の関税が今11.何%と8.5%の2種類しかございません。ゼロになっても本当に20円、30円の世界、200円、300円で売っているもののうち、そういうレベルということで、余り国内でそれほどの脅威論は出ておりません。ただ、豚肉が安くなるということが鶏肉のマーケットを食うのではないかとと言われていまして、そちらのほうが非常に影響が大きいのかなと思っております。

○**佐藤政孝講師** バイオマスはいつペイしますかという非常に難しい御質問なのでございますけれども、初期投資が60億円かかりますので、今の肥料にするのも、もうかっている事業ではございませんで、かなり持ち出しが出ております。考え方とすれば、持ち出し

が減るとというのが効果になりますけれども、まず数年間は非常に償却が高い時代がございますので、5年後ぐらいというふうに御理解いただければいいかなと思います。これはなかなか計算が難しいです。

○千葉伝委員 ありがとうございます。いずれTPPは今までのやり方をすれば大丈夫だということでこれからも頑張ってくださいと思います。

バイオマスの件は、むしろ鶏ふんの処理に過去これまで困っていたと、それを有効に利用した上で発電売電するということなわけで、その分については国内で5番目ですか、1番目の南国興産に私ども昔に行って見てきたことがあるのですけれども、岩手にもできればいいなと思っていたのが実現するというので、またほかの例になるのではないかと考えています。

また、これから先の話であります、今県内は御社を入れて13社のチキン協同組合の中で、御社が半分近い部分を頑張ってください。現在県内では年間1億990万羽ですか、約1億1,000万羽ということで、1、2位の鹿児島県、宮崎県に、岩手があと2,000万羽を増産というか、増羽すれば2番目あるいはトップになる可能性があると思います。御社を含めて岩手である程度増産傾向に持っていく考え方で進めていくかどうか、先の計画を教えてください。

その上で、岩手県の農業という分類、チキン産業は県内2位の産出額497億円、農業産出額が2,400億円、岩手県の農業の部門では畜産が第1位で、畜産の中でチキン、鶏肉が1位と、こういうあたりの訴えがいいのかなと、2番目でいいのかなという話が昔はちょっとあったのですけれども、これ私の個人的な考えであります。

そういう意味で、これから将来の増産、増羽の計画、それから将来的に岩手のチキンという部分も考えた上でお聞かせください。

○十文字保雄講師 岩手県産は今全国で第3位なわけですが、どちらかというと新しい産地というふうに業界では言われていまして、鹿児島県、宮崎県が古い産地で首都圏の大半をカバーしていた時代がありました。そこに岩手県がちょっとふえてきて、今、首都圏エリアの過半を東北産が占め、岩手県産が過半を占めるようになってきているという状況でございます。それだけ岩手県産が評価されていると、失礼な言い方ですが、やはり鹿児島県、宮崎県、南国の気質より岩手県の気質が非常にまじめで、熱心に仕事をする、言われたとおりにちゃんといい仕事をしてくれるということでございます。また、鹿児島県、宮崎県からは2日かかって首都圏エリアに届きますので、岩手県は1日で届き、店に翌日並べられるということもありまして、東北のほうが今どんどん支持されて、つくればほぼ売れるような状況と言ってもいいくらいではないかなと思っております。

ですので、3県と言いましたが、4県目が青森県で、5県目が北海道、6県目が徳島県あたりだと思います。それ以外の県は結構都会でございまして、そういったところはもう消滅する運命にほぼあるわけで、そういう消滅する運命にあるところをリカバリーするのが主要産地の我々でございまして、もう大体鹿児島県、宮崎県、岩手県は毎年1%

や2%ふえていて、減っているところは減っているというのが今国内の構図になっております。

○千田美津子委員 きょうはありがとうございました。特に私は人・動物・環境の健康ということで、初めてお聞きしましたが、御社は本当にしっかりとした目標を持って頑張っておられるということで、これからも頑張っていたきたいと思います。私は大分前に耳にしたのですが、チキン産業の特徴の中で、鶏は50日から60日で商品化ができるということで、十文字さんは違うと思うのですが、実はホルモン剤を投与しているという話を聞いたことがありました。そのときにお話を聞いたお母さん方が、子供たちになかなかそうなるということがあったので、現状とすればそういうことはやられているのかどうか、お伺いしたいと思います。

○十文字保雄講師 ホルモン剤というのは本当にうわさのレベルではないかなと思います。一番課題になっているのは抗生物質の関係ですが、世界的に見ても日本のルールが一番厳しくて、出荷前7日間は抗生物質を与えてはいけませんというのが飼料安全法で決まっております。これぐらい厳しいルールというのは世界にありません。逆に言いますとブラジルから入ってくる鶏肉は前日まで与えたものがそのまま国内に入ってきて、日本の入り口としては、検査すれば肉には抗生物質が出てこないのが、外国のものをとがめる必要はありませんというのが現実です。日本国内のほうがそれだけ、それ以上にルールが厳しい、そんなような世界でかなり厳しい条件のもとやっているというのが現実だと思います。

○千田美津子委員 ありがとうございます。私もちゃんと確かめたいとずっと思ってそのままにしていたので、多分輸入物とか、ちょっとはつきりしないのですが、そういう部分でのことだったのかと思います。いずれ、日本の農畜産物の基準は本当に素晴らしいものがあって、そこで輸入物は冷凍化なので差別化していると、そういう部分での徹底だと思って、国内でのHACCP初め衛生管理が本当にすごいなと思っています。そういう点では、従業員との関係も素晴らしいなと思っていますし、これからも安心・安全な食料、それから雇用を、本当に正職員さんが大半だということで、本当に素晴らしいなと思っています。ぜひこれからも頑張っていたきたいなと思います。

○高橋孝眞委員 きょうはありがとうございました。私は牛を飼っているのですが、そのこととは関係ないのですが、今米が余っているという状況でありまして、岩手県内でも農業協同組合を中心としながらえさ米をつくっているわけですが、えさ米についてはどの程度利用されているのか、利用されていないのかということをお一つ教えていただければと思います。

それから、もう一つは、死亡する事故率も多分あるのだらうと思いますが、その事故に遭いました、死亡した鶏についてはどのような処理をされているのかお願いを申し上げたいと思います。

細かいことなのですが、バイオマス発電の際に12万6,000トンを経営者が処理しますよと、こういう話なのですが、焼却灰についてはどの程度発生をするという予測

で配慮されているかということと、もう一つはバグフィルターを使っていますけれども、バグフィルターは石灰ですかね、それは通した後の処理というのはどのように考えておられるのかについて教えていただきたいと思うのですけれども、お願いします。

○佐藤政孝講師 えさ米と死亡鶏のほうは私のほうから説明させていただきます。

飼料米のほうですけれども、いっぱい使っています。5%ぐらいは入っていると思います。それは、指定された岩手県のものとか、軽米町の米を全部お約束でやっている部分もございまして、ほかから回ってきた米を使ってございまして、現在、鶏のえさには大体5%ぐらい使っております。今後、飼料メーカーもかなり使っていきたいということですので合意ができておりますので、今後ともふえていく方向にあらうかと思っております。

そして、えさ米は40万トンぐらい国内で出ているかと思っておりますけれども、飼料業界では120万トンぐらいまで使うだろうということで取り組む方向で決まっております。そのとおり動いていると思っております。

死亡した鶏の取り扱いでございますけれども、化製業者、レンダリング会社のほうに搬入しております。県内でいいますと花巻市の太田油脂産業株式会社、あとは八戸市の三協理化工業株式会社に全量持っていきまして、きちんと法律のもとで処理するというところでございます。ちゃんとやっております。

○小林義昭講師 灰の件をお答えしたいと思います。

およそ10%ぐらい、つまり400トンの原料を使いますと40トンの燃焼灰があります。基本的には肥料の燃料として肥料メーカーに売る予定でございます。残りのバグフィルターを通したときの飛灰といいますか、これは完全に産廃物ですので、そういう業者にお金を払って処理することになります。ですので、肥料としている灰とそうでない灰を完全に区分けして、このバグフィルターをしっかりと通した形で正規なものとして使いますから安全に対処します。

○高橋孝眞委員 ありがとうございます。そうすると、先ほどの燃焼灰については肥料メーカーさんにほとんど行ってしまうということなのですかね。

もう一つ聞きますけれども、岩手県で南部かしわという品種がありますが、育種もやられているということですが、岩手県のチキンというような内容でこれからも対応されていくのであれば地鶏である南部かしわを使うことのお考えはないのかどうかについて聞かせていただきたいと思っております。

○十文字保雄講師 南部かしわは、以前に扱ったことがございまして、一戸町の柴田物産に処理まで一貫して農場も工場もやっていただいて、我々を通して販売したことがあったのですけれども、やはり数量がかなり細くて立ち消えになったということがございます。もう15年ぐらい前になると思っております。その後は、どちらかという株式会社アマタケのほうに、エンジンが移ったのではないかなと思っております。

○工藤勝博委員長 ほかにありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○**工藤勝博委員長** ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了いたします。

十文字様におかれましては大変御多忙な中、雇用の確保、厳しい県北において事業展開をなされております。さらにまたこれからも頑張ってくださいようお願いしたいわけですが、資料にありますように鶏肉の消費拡大がまだまだ見込めるということでございますし、私は岩手県の農業産出額の中でも米よりブロイラーのほうが一番だと思っていました。そういう中で、さらにこれからの御社の発展を御祈念申し上げて、閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。

委員の皆様には次回の委員会運営等について御相談がありますので、しばらくお残り願います。

それでは、次の当委員会の今年度の委員会調査についてであります。お手元に配付しております委員会調査計画(案)のとおり実施することとし、6月の調査の詳細について、当職に御一任願いたいと思っておりますが、御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○**工藤勝博委員長** 異議なしと認め、さよう決定をいたします。

○**嵯峨耆朗委員** 1点だけ、別に異議はないのですが、当日になる前にどういった方面だと情報提供してもらえれば助かります。

○**工藤勝博委員長** わかりました。早目に確定して皆さんにお知らせしたいと思います。

それから、8月に予定されております当委員会の調査事項についてであります。御意見等がありましたらお願いいたします。よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○**工藤勝博委員長** 特に御意見がなければ、当職に御一任願いたいと思っております。先ほど嵯峨委員からもありましたように、早目にこれも連絡申し上げたいと思っておりますので、よろしくお願いをいたします。

○**嵯峨耆朗委員** 早くなくてもいいですが、決まったら教えてください。

○**工藤勝博委員長** はい、決まったら。

以上をもちまして、本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。大変お疲れさまでした。